

おこない、その密度ならびに形態的特徴についての研究を進めてきた。

昨年度までに、体毛密度検算用の皮ふについては8地域、体毛については13地域に生息するサルから収集している。その結果については、本年報 Vol. 15 に報告したとおり、一般に毛の長さ・密度共に寒冷地のサルの方が温暖地のそれよりも大きな値を示している。

本年度は、屋久島・地獄谷において調査・収集を実施し、志賀A群所属の58個体から材料を採取することができた。この資料については、現在分析中であるが、アダルトの体毛密度だけについていえば、924.6 (本数/1 cm サークルの皮ふ、N = 10) という値が得られた。この値は、これまで得られているニホンザルの体毛密度の中では、下北半島のものの1028.9 という値について大きく、前回の報告を支持する結果が得られたと考える。

課 題 9

霊長類における足根部靱帯の形態学的研究および足部交連骨格の計測学的研究

平本嘉助・篠田謙一 (産業医大)

ニホンザルの足における足底腱膜および足根部のLigg. tarsi plantare と Ligg. tarsi dorsalia について、その形態を調査した。足底腱膜は脛側腱膜と腓側腱膜とに分離するが、その量的変異においてLoth (1908) は5型に分けている。ニホンザルの足底腱膜はLoth の分類によるⅢ型に相当する。

長足底靱帯は踵骨下面中央部から生じ、第4・5中足骨および骨間筋の起始部となるように見られる。しかし、詳細な剖出によると、この靱帯の第5中足骨底下面の隆起下で種子骨が見い出される。また、第4中足骨底下面は第5中足骨と同様の連続した骨の隆起が形成されており、この靱帯との間に関節面が見られる。この観察結果から、この靱帯は表層外側部が骨間筋の起始腱、深層内側部が本来の靱帯としての複合形成物ではないかと考察される。第4・5中足骨と立方骨の間の可動性は比較的大きな動きを有するものと示唆される。他の靱帯については調査中である。(平本)

足部の様に多くの骨が複雑に組み合わされて構成されている部分では、晒骨による個々の骨の計測によって、各骨の変異を知ることはできても全体の形の変化について捉えることは困難である。そこで靱帯等によって足部の骨が交連している状態での計測を実施し、その変異の幅などを解明し、あわせて機能解剖学的な考察を行う事を目的として研究を行った。研究の対象として、今年度はニホンザルを用い、足部に独自に40の計測項目を設定した。これらは全て二点間の直線距離であり、ノギスを用いて0.1 mmまで読み取った。現在までに32体の計測を終ったが、このうち6歳以上の個体は12、それ以下のものが18、不明2個体で、加齢による変化がかなり計測の結果に影響を与えていると考えられた。今後は、計測する例数を増やして種内変異の幅を正確におさえる一方、更にマカクの属内変異を知る為に、他の種の計測も行う予定である。(篠田)

霊長類における筋系の比較解剖学的研究

小泉政啓・本間敏彦 (順天堂大・医)・
児玉公道・川井克司 (金沢大・医)

神経一筋特異性に基づき、原猿類の筋系についてヒトと比較しつつ検討する。現在継続中のため途中所見を述べる。

○体幹：エリマキキツネザル、ブラウンキツネザル。①胸筋筋は第1～5肋骨につくが、神経は外側皮枝前枝 (Th 2) が筋の裏面から分布する。このことからこの筋は外腹斜筋の最上位部の飛地と考えられる。②長斜角筋と思われるものは第4・5肋骨に停止するが、神経は胸神経ではなく、おそらく中斜角筋が胸郭上部までのび出したものであろう。ただ外側皮枝がこの筋を貫く関係にある点は注意される。③腹直筋は第1肋骨までついており、神経はTh 4 以下の分節のものが分布している。長斜角筋との移行筋がみられるばかりでなく、外腹斜筋との重り合いがみられ、その境界は判然としないが、ヒトでは外側皮枝が腹直筋に分布することがあることと関連がありそうである。④前皮枝はTh 1-3に見られ、かつ腹直筋より正中で肋間筋を貫く。それ以下は腹直筋の筋枝となる。○前腕域：スローロリス、ワオキツネザル。正中